

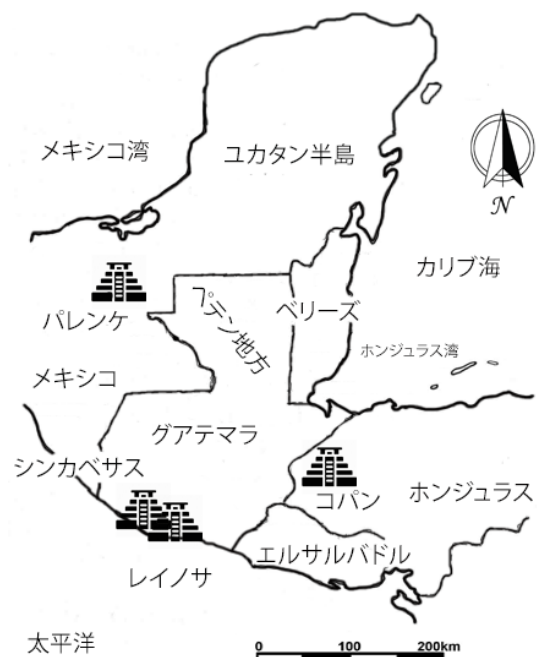
古代マヤ文明南西周縁域の広域考古人骨研究：食とライフスタイルについて

岡山大学
大学院社会文化科学研究科

鈴木真太郎

古代マヤ文明はもはや謎の古代文明ではない。考古学を中心とした多くの調査・研究が進み、その謎と神秘は少しずつだが確実に科学的知見へと変貌を遂げている(青山 2015)。しかし、その一方で古代マヤ考古研究の世界的潮流には、一定の「偏重」とも言える傾向がある。そして、その傾向から取り残されがちな地域の一つが、グアテマラ南海岸地方である。古代マヤ文明圏の南西周縁地にあたる地域である。

もちろん同地において考古学研究が全く行われていないということでは決してない。抄録という性格を踏まえ、ここで網羅的に文献や先行研究を引くことは控えるが、1900年代の後半には多くの遺跡で盛んに発掘調査が行われ、先古典期にまで遡る古代マヤ文明黎明期の非常に重要な知見が得られていた(Guernsey et al. 2010; Love & Kaplan 2011)。しかし、21世紀も約20年が経過した現在、グアテマラ南海岸で体系だった広域の新たな発掘調査が始まったという心踊るニュースはあまり聞かれない。同地域の遺跡の多くが私有地にあることもあり、サトウキビ生産等の現代グアテマラ経済を支える活発な農業活動(Mejía 2016)と大規模な考古学発掘が少しずつ相入れなくなっているのである。タカリク・



古代マヤ文明圏略図（鈴木作成）

アバフ遺跡など国が管理する遺跡公園として調査が継続して行われているケースもある(Schieber & Orrego 2010)。しかし、その他多くの南海岸の遺跡群に関しては、その適切な保護さえ危険視されているのが実情である(Chinchilla 2012)。

こういった状況下、本研究は1970年代から90年代にかけて発掘され、グアテマラ国立人類学歴史学研究所(IDAEH)に蓄積されている膨大な発掘済資料、特に古人骨資料をバイオアーキオロジー(生物考古学)の観点から再評価しようという試みである。広域に渡る体

系的な骨学鑑定と先進の理化学分析を通して、新たなグアテマラ南海岸像を考察し、先古典期から古典期にかけての激動する文明周縁地の理解を深めようというのである。

資料

本発表ではグアテマラ、エスクイントラ県のシンカベサス遺跡出土の考古人骨群に調査対象を絞った。時系列的に概ね先古典期後期（紀元前300年頃）に属する約70個体の考古人骨群である（Beaudry & Whitley 1987; Beaudry 1991）。この選定は、同考古人骨群が、1）まず保存状態に優れているということ、2）遺跡の広域にわたる発掘から得られた人骨群であるということ、3）住居跡から出土した世帯集団である可能性が高いこと、以上の三点を理由としている。こういった考古コンテキスト上の条件を満たすことで、古典期マヤを代表するコパン遺跡の巨大考古人骨群（鈴木 2017）や同じグアテマラ南海岸地方のレイノサ遺跡考古人骨群（Mejía & Suzuki 2016）と、時代や地域を跨いだ細密な比較検証を行うためである。

評価方法

以下に挙げる鑑定／計測／復元を、それぞれの作業に必要な部位が残存している個体において、行なった。1）基礎骨学による性別／死亡時年齢の鑑定（White et al. 2011）、2）四肢長骨の形態計測（Ruff 2008; Wescott 2006）、3）生存時最大身長への復元（Wright & Vásquez 2003; Del Ángel & Cisneros 2004）、4）頭蓋変形の有無・様式の鑑定（Tiesler 2014）、5）歯牙う蝕罹患状態の鑑定（Cucina & Tiesler 2003）、6）大臼歯の損耗状態の鑑定（Brothwell 1987）、7）炭素／窒素安定同位体比の計測（Tykot 2006）、8）ストロンチウム安定同位体比の計測（Burton & Hahn 2016）。

評価結果に基づいた予備考察

先古典期末期の古代都市シンカベサスに暮らした人々の様相。

概ね定住農耕を営む集団であるが、古典期コパンの都市部の住人たちとはライフスタイルがだいぶ異なっていたと考えられる。コパンで見られた明白な分業・専業が進んでおらず、男女を問わず「できることをできる人が行う」全員参加型の社会であったようだ。一方で古典期マヤと同様の特徴も認められた。トウモロコシに依存した多様性の乏しい糧食文化と活発な移民流動である。また活発な移民流動と呼応するように多様な民族性も確認された。様々な形態の頭蓋変形が、変形なしのケースも含め、混在しており、今後は「多民族性」がシンカベサスという街の市井、さらにはグアテマラ南海岸地方を描写する上でのキーワードとなってくる可能性も考えられる。

レイノサ遺跡の特異性。

本研究の比較検証を通し、先行研究で取り扱ったレイノサ考古人骨群の特異性が浮き彫りになった。時代、地域を異にするシンカベサスとコパンの間で認められた“汎マヤ文明的”とも考えられる特徴（食文化、移民流動）が、レイノサ遺跡で認められないのである。これにより考古学的な見地から示唆されていた「レイノサ考古人骨群は特殊な背景を持った限定的な集団埋葬である」（Mejía & Suzuki 2016）という可能性が高まった。

古代マヤ文明の発達過程理解における寄与。

活発な移民流動が先古典期という文明黎明期から認められた意義は大きい。古典期コパンで確認されたほど大規模な移民ネットワークではないが（鈴木 2017）、少なくとも海岸線に沿った移民、グアテマラ高地からの山岳地帯を跨いだ移民が確認されている。古代マヤ文明の発展において、多様な土地から多様な人々が移民し交流する、という事象は重要な要素であったようだ。

今後の展望

同様の方法論に基づいた研究を同じくグアテマラ南海岸のバルベルタ遺跡考古人骨群、ウフシュテ遺跡考古人骨群、ホンジュラスのタルグア洞穴考古人骨群に順次拡大している。同様にメキシコ、パレンケ遺跡第四グループ出土の考古人骨群でも調査を行っており、コパンとの共時的比較検証では古典期の都市集団に対する理解が深まることも期待されている。

参考文献

青山和夫 2015 『マヤ文明を知る事典』、東京堂出版、東京

鈴木真太郎 2017 「ストロンチウム及び酸素安定同位体による移民動態の再構築：古典期コパン王朝史における新たな展望」、中村誠一編 『異分野融合研究によるマヤ考古学の新展開』、金沢大学、pp. 35-60、金沢

Beaudry, Marilyn P., & Whitley David S. Informe final de la temporada de campo de 1987. El sitio de Sin Cabezas, Escuintla, Guatemala. Informe final presentado a la Dirección General del Patrimonio Cultural y Natural Ministerio de Cultura y Deportes, Guatemala.

Beaudry, Marilyn P. 1991. Reporte técnico de análisis especializados, Temporada de campo 1988. El sitio de Sin Cabezas, Escuintla, Guatemala. Informe presentado a la Dirección General del Patrimonio Cultural y Natural Ministerio de Cultura y Deportes, Guatemala.

Brothwell, Don R. 1987. *Desenterrando huesos*. Fondo de Cultura Económica, México D.F.

Burton, James H., & Hahn Rachel. 2016. Assessing the “Local” $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ Ratio for Human. In

Isotopic Landscapes in Bioarchaeology, edited by G. Grupe and G.C. Glynn, pp.113-121. Springer, Heidelberg.

Chinchilla, Oswaldo. 2012. Archaeology in Guatemala. Nationalist, Colonialist, Imperialist. In *Mesoamerican Archaeology*, edited by Deborah L. Nichols & Christopher A. Pool, pp. 55-68. Oxford University Press, Oxford.

Cucina, Andrea, & Tiesler Vera. 2003. Dental Caries and Antemortem Tooth Loss in the Northern Peten Area, México: A Biocultural Perspective on Social Status Differences Among the Classic Maya. *American Journal of Physical Anthropology* 122(1):1-10.

Del Ángel Escalona, Andrés, & Cisneros Héctor B. 2004. Technical Note: Modification of Regression Equation Used to Estimate Stature in Mesoamerican Skeletal Remains. *American Journal of Physical Anthropology* 125(3):264-265.

Guernsey, Julia, Clark John & Arroyo Barbara. 2010. *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica's Preclassic Transition*. Dumbarton Oaks, Washington, DC.

Love Michael, & Kaplan Jonathan. 2011. *The Southern Maya in the Late Preclassic: the Rise and Fall of an early Mesoamerican Civilization*. University Press of Colorado, Boulder.

Mejía, Héctor. 2016 Proyecto de registro y rescate arqueológico del plan de expansión del sistema de transporte de energía eléctrica PET-01-2009, Fase II, en la región de la Costa Sur y el Altiplano del territorio nacional guatemalteco. Año 2014-2015 (Ampliación 2016). Informe final presentado a la Dirección General del Patrimonio Cultural y Natural Ministerio de Cultura y Deportes, Guatemala.

Mejía Héctor E., & Suzuki Shintaro. 2016. Human Sacrifice in the Preclassic Southern Coast of Guatemala: A Brief Report from Reynosa, Escuintla. *Mexicon* XXXVIII(5):119. Möckmühl.

Ruff, Christopher B. 2008. Biomechanical Analyses of Archaeological Human Skeletons. In *Biological Anthropology of the Human Skeleton*, 2da. ed., edited by M. Anne Katzenberg & Shelley R. Saunders, pp. 183-206. John Wiley & Sons Inc., New Jersey.

Schieber de Lavarreda, Christa, & Orrego Corzo Miguel. 2010. Preclassic Olmec and Maya Monuments and Architecture at Takalik Abaj. In *The Place of Stone Monuments: Context, Use, and Meaning in Mesoamerica's Preclassic Transition*, edited by Julia Guernsey, John Clark & Barbara Arroyo, pp.177-205. Dumbarton Oaks, Washington, DC.

Tiesler, Vera. 2014. *The Bioarchaeology of Artificial Cranial Modifications. New Approaches to Head Shaping and its Meanings in Pre-Columbian Mesoamerica and Beyond*. Springer, New York.

Tykot, Robert H. 2006. Isotope Analyses and the Histories of Maize. In *Histories of Maize: Multidisciplinary Approaches to the Prehistory, Linguistics, Biogeography, Domestication, and Evolution of Maize*, edited by John E. Staller, Robert H. Tykot & Bruce F. Benz, pp. 131-142. Academic Press, Amsterdam.

Wescott, Daniel J. 2006. Effect of Mobility on Femur Midshaft External Shape and Robusticity. *American Journal of Physical Anthropology* 130:201-213.

White, Tim D., Black Michael T. & Folkens Pieter A. 2011. *Human Osteology. 3rd. ed.* Academic Press, San Diego.

Wright, Lori E., & Vásquez Mario A. 2003. Estimating the Length of Incomplete Long Bones: Forensic Standards from Guatemala. *American Journal of Physical Anthropology* 120(3):233-251.

謝辞

本研究は「2016年度サントリー文化財団若手研究者のためのチャレンジ研究助成」、「日本学術振興会科学研究費助成若手研究B 課題番号 17K17754」、並びに「日本学術振興会科学研究費助成国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）課題番号 17KK0023」による助成を受けた。すべての骨学鑑定はグアテマラ、トレクサ社エクトル・メヒア氏（Héctor Mejía）とグアテマラ国立人類学歴史学研究所（IDAEH）、グアテマラ、デルバジェ大学トマス・バリエントス教授（Tomás Barrientos）の協力のもと、同学考古学人類学研究センター（UVG/CIAA）で行われた。ストロンチウム同位体の分析は米国ウィスコンシン大学ダグラス・プライス名誉教授（T. Douglas Price）の協力のもとノースカロライナ大学で行われ、炭素／窒素同位体に関しては茨城大学青山和夫教授、アリゾナ大学猪俣健教授、東京大学大森貴之特任研究員の協力のもと、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室にて行われた。また本研究で比較検証の対象としたコパン遺跡考古人骨群の研究においては金沢大学中村誠一教授からご協力をいただいた。上記にあげる諸事業、諸機関、諸氏に対し、本抄録の公表にあたり深く御礼を申し上げる次第である。

メソアメリカ社会にみる“移動”の研究：イツァー族を例に 白鳥祐子

はじめに

植民地期に書かれたメソアメリカ先住民族の書物には、移動や移住の過程がしばしば記述されている。それらの移動の記述は、特に先住民族の出自を物語っており、地理的に遠く離れたある地点から長い時間をかけて移動を繰り返した結果、民族の首都にたどり着いたという、歴史というよりも神話的な要素が強い。これらの起源神話のような出自物語は、時空間の距離を用いて、民族の中でも王族の正当性を裏打ちする事を目的に書かれており、王族の正当性を主張する材料としてせんスペイン期からしばしば政治的に利用されていた (Boone 2000; Smith 2003)。しかしながら、考古学を通じた「移動」の証明は難しく、これまでほとんど研究されていなかった(Anthony 1990; Cowgill 2013)。2000年代以降同位体分析などの進展とともに、社会的／文化的変化の説明モデルとして、移動“migration”は再び注目を集めている(Burmeister 2000; Cowgill 2013; Freiwald 2012; Lucassen et al. 2010; Rice and Rice 2018)。

この発表では、植民地期に書かれたマヤ社会最後の先住民であるイツァー族の起源神話を、これまでの歴史学・図像学・言語学のデータとともに、近年明らかになった考古学のデータを用いて検証する。

メソアメリカにおける移動の起源神話

現存する植民地期メソアメリカの書物の中から、いくつか移動を繰り返す起源神話を紹介する。16世紀初頭にスペイン人に征服されたアステカの起源神話は、スペイン人が到来する数世紀前に、北部に住む狩猟民のチチメカ人と都市（トーラン）に住む文明人トルテカ人がメキシコ盆地へ南下してくる移住神話に始まる(Davies 1977, 1980)。次に神話上の土地、アストランまたはチコモストックの7つの洞窟からメキシコ盆地へ南下して移住してきたと、16世紀に描かれた絵文書や民族誌に記している (Calnek 1978; Davies 1980; Nicholson 1971; Sahagún 2002; Smith 1984; Torquemada 1969)。これらの起源・移住神話は民族の起源に焦点を当てて、支配王朝の重要な出来事を記録することを目的としていた(Nicholson 1971)。民族の起源は先住民の歴史の最も重要な要素であり、彼らの民族的アイデンティティを正当性を裏打ちした (Davies 1980; Nicholson 1971; Smith 2003)。

ユカタン半島の先住民によって植民地時代に書かれた書物にも、多くの起源神話

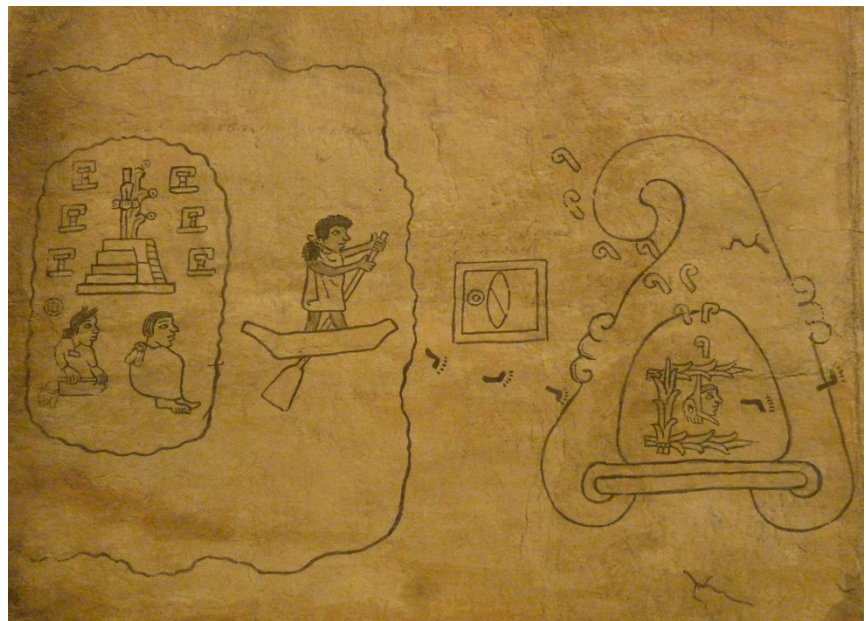


図1: Codex Botuini. 起源とされるアストランを出て最初の停泊地へ向かっている。Wikipedia より転載

それぞれの家系を他の王族家系と区別するために、神話的な起源を伴っている (Restall 2006:277)。その一つがイツァー族に関する書物である。



図2：ユカタン半島と主な後古典期の遺跡。発表者作成

イツァー族

16世紀にスペイン人がユカタン半島へ上陸した時、総称してイツァー族と呼ばれる集団が、現在のグアテマラの広大な低地の森林地帯を統治していたと、スペイン人の記録に残っている。このイツァー族はユカタン半島北部では、10世紀から12世紀に栄えた都市、チチェンイツァを治めていたイツァー族と関係があり、南部のグアテマラ・ペテン地域を治めていたイツァー族は、北部のチチェンイツァからやってきたとスペイン人に語っている。ペテン地方のイツァー族は現在のペテンイツァ湖に浮かぶ島（フローレス島）にタイツァ(Tayza)またはノフペテン(Nojpeten)と呼ばれた首都を置き、カン・エク(Kan Ek')と言う名の王が統治していた (Jones 1998)。このペテン・イツァー族は、ヨーロッパ人によって征服された最後のマヤ王国で、1697年3

月13日にスペイン人によって征服された。

イツァー族に関しては、スペイン人征服者とキリスト教宣教師の記述から確認できるが、チチェンイツァのイツァー族とペテン・イツァー族とのつながりはよくわかっていない。ここでは、ユカタン北部の先住民が植民地時代に残した年代記の中から、チチェンイツァのイツァー族とペテン・イツァー族のつながりを、「移動」に注目しながら裏付けていく。

歴史文書におけるイツァー族の移動

ユカタン半島マヤ族の口頭伝承の歴史や予言をまとめた本「チラム・バラムの書」の多くは、16世紀から17世紀の植民地時代初期に書かれたものとされ、利用する必要・目的に応じて、18世紀頃まで何度も追加されたり書き換えられていた (Roys 1967)。これらのチラム・バラムの書がいくつかの村から見つかっており、そのなかにイツァー族に関する記述がある。

スペイン人によるイツァー族に関する記述

16世紀から17世紀に書かれたイツァー族の移動を裏付けるデータとしてまず、スペイン時による記述から見ていく。イツァー族が最初に出会ったヨーロッパ人は、恐らくエルナン・コルテスとその一行である。彼らは1525年にペテン通過した際、イツァー族の首都タイツァに滞在したとされる。コルテスはメキシコシティに戻った1526年にスペイン国王に宛てた手

紙の中で、タイツァ (Taiza) と呼ばれる地方で支配者のカンエク (Canec) に出会った、と記している (Cortés1986)。コルテスとともに遠征中にイツァー族に会った中尉 Bernal Díazdel Castillo もまたスペイン征服についての記述をするが、遠征から 50 年後に出版しているため、イツァー族に関する記述の信頼性は低いと考えられている (Scholes and Roys 1968)。コルテスの訪問から 1697 年に征服されるまで、イツァー領内にキリスト教宣教師などが度々訪れた記録が残っている。

碑文研究によるデータ

植民地期に書かれたイツァー族の移動を裏付けるデータとして他に、碑文研究がある。石碑や土器に見られるマヤ文字の碑文の多くは古典期 3 世紀～10 世紀の間に集中し、後古典期にはほとんど見られない。イツァー族が 7 世紀終わりから 8 世紀頭にかけて南部から北へ移動したと言う記述からすると、イツァー族は 7 世紀まで南部にいたことになる。グアテマラ、ペテン地方の古典期の遺跡から出土する石碑や土器に、イツァー族に関する記述があることがわかっている。これらの記述はイツァー族と言うよりも、支配者「カンエク」という称号が碑文に言及されている。

考古学によるデータ

近年のペテン地域での考古学調査は、イツァー族が治めていたペテンイツァ湖西側に焦点を当てている。特に建造物形式と土器や石碑の図像学に注目し、ペテンのイツァー族がチチェンイツァから移動して来た証拠を探る。イツァー族が、チチェンイツァとの繋がりを強調していたとすると、チチェンイツァの建造物形式を模していた可能性もある。図像学に注目してみると、チチェンイツァは羽の生えたヘビ (Feathered Serpent) の神話と深く関わっており、ナワトル語でケツァルコアトル、マヤ語でククルカンと呼ばれる、商人、金星、風の神様などと結びついている (Milbrath 2000; Miller and Taube 1993)。ヘビまたは爬虫類のモチーフは、メソアメリカにおいて後古典期の国際的シンボルの一つであり、7～10 世紀にかけて、メソアメリカ全土で陶器や壁画に共通のシンボルやモチーフが描かれていた (Smith and Berdan 2003)。ヘビのモチーフはチチェンイツァで一般的で、特に El Castillo 神殿の土台が有名である。それはマヤパンの神殿でも見られる彫刻だ。同様に、ペテン地域においてもヘビの彫刻は確認されている。

考察と結論

植民地時代に書かれたマヤの年代記によると、イツァー族は 7 世紀からペテン地域とユカタン半島北部の間を複数回移動していた。イツァー族の起源については触れていないが、「南部から来た」としている。そして 11 世紀前後にユカタン半島北部で栄えたチチェンイツァを興し、崩壊後ペテン地域に戻るものや、その後に栄えたマヤパンに行くものもいた。スペイン人の記述から、年代記に登場する地名が存在していたことが確認できるため、イツァー族は実際に幾度も移動していたと推測できる。スペイン人侵攻後、様々な家系集団が逃れてペテン地域に流入し、対立する集団との差別化を図るために、イツァー族はあえてチチェンイツァとの関連性を強調したと考えられる。今後、DNA やストロンチウムなどの同位体分析によって、ペテン地域とユカタン半島北部との間で移動した形跡を探る。

参考文献

Anthony, David M.

1990 Migration in Archaeology: The Baby and the Bathwater. *American Anthropologist* 92(4):895–914.

- Boone, Elizabeth H., and Michael E. Smith
2003 Postclassic International Styles and Symbols Sets. In *The Postclassic Mesoamerican World*, edited by Michael E. Smith and Frances F. Berdan, pp. 186–193. The University of Utah Press, Salt Lake City, UT.
- Boone, Elizabeth H.
1991 Migration Histories as Ritual Performance. In *To Change Place: Aztec Ceremonial Landscape*, edited by David Carrasco, pp. 121–151. University Press of Colorado, Boulder, CO.
- Burmeister, Stefan
2000 Archaeology and Migration: Approaches to an Archaeological Proof of Migration. *Current Anthropology* 41(4):539–567.
- Calnek, Edward E.
1978 The Analysis of Prehispanic Central Mexican Historical Texts. *Estudios de Cultura Náhuatl* 13:239–66.
- Carmack, Robert M.
1968 Toltec Influence on the Postclassic culture History of Highland Guatemala. In *Archaeological Studies of Middle America*, Publication No. 26, pp. 42–92. Middle American Research Institute, Tulane University, New Orleans, LA.
- Christensen, Alexander F.
1997 *History, Myth, and Migration in Mesoamerica*. <http://www.ku.edu/~hoopes/aztlan/History.htm>.
- Cortés, Hernán
1976 Quinta Carta-Relación de Hernán Cortés al Emperador Carlos V, Tenuxtitan, 3 de septiembre de 1526. In *Cartas de Relación*, by Hernán Cortés, pp. 219–283. Editorial Porrúa, Mexico, D.F.

1986 *Hernán Cortés: Letters from Mexico*. Yale University Press, New Haven, CT.
- Cowgill, George L.
2013 Possible Migrations and Shifting Identities in the Central Mexican Epiclassic. *Ancient Mesoamerica* 24(1):131–149.
- Davies, Nigel
1973 *The Aztecs: A History*. University of Oklahoma Press, Norman, OK.

1977 *The Toltecs Until the Fall of Tula*. University of Oklahoma Press, Norman, OK.
- Edmonson, Munro S.
1982 *The Ancient Future of the Itza: The Book of Chilam Balam of Tizimin*. University of Texas Press, Austin, TX.
- Freiwald, Carolyn
2012 Maya Migration Networks: Reconstructing Population Movement in the Belize River Valley During the Late and Terminal Classic. Ph.D. dissertation, University of Wisconsin-Madison, Madison, WI.

- Lucassen, Jan, Leo Lucassen, and Patrick Manning (editors)
 2010 *Migration History in World History: Multidisciplinary Approaches*. Koninklijke Brill NV, Leiden, The Netherlands. Maler, Teobert
 1910 *Explorations in the Department of Peten, Guatemala: Tikal*. Vol. 5, No. 1, Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Cambridge, MA.
- Milbrath, Susan
 1999 *Star Gods of the Maya: Astronomy in Art, Folklore, and Calendar*. University of Texas Press, Austin, TX.
- Miller, Mary, and Karl Taube
 1993 *The Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya: An Illustrated Dictionary of Mesoamerican Religion*. Thames and Hudson, New York, NY.
- Nicholson, H. B.
 1971 Pre-Hispanic Central Mexican Historiography. *Investigaciones Contemporáneas Sobre Historia de México*:38–81.
- Rice, Prudence M., and Don S. Rice
 2018b (editors) *Historical and Archaeological Perspectives on the Itzas of Petén, Guatemala*. University Press of Colorado, Boulder, CO.
- Roys, Ralph L.
 1967 *The Book of Chilam Balam of Chumayel*. University of Oklahoma Press, Norman, OK.
- Sahagún, Fray B. d.
 2002 *The Florentine Codex: General History of the Things of New Spain, 12 volumes*. University of Utah Press, Salt Lake City, UT.
- Smith, Michael E.
 1984 The Aztlan Migrations of the Nahuatl Chronicles: Myth or History? *Ethnohistory* 31(3):153–186.

 2003 *Comments on the Historicity of Topiltzin Quetzalcoatl, Tollan, and the Toltecs*. The Nahua Newsletter No. 36, Center for Latin American and Caribbean Studies, Indiana University, Bloomington and Indianapolis, IN.
- Smith, Michael E., and Frances F. Berdan (editors)
 2003 *The Postclassic Mesoamerican World*. University of Utah Press, Salt Lake City, UT.
- Torquemada, Fray J. d.
 1969 *Monarquía Indiana, 3 Vols*. Porrúa, Mexico City.